『今鏡』における願文の一節「鼇海の西には うみの宮、御産平安頼みあり」の解釈をめぐって――神功皇后の「うみの宮」に着目して――

陳　文瑤

はじめに

『今鏡』すべらぎの下第三「男山」には、

又ただならぬことおはしませば、この度さへうち続かせ給はむも口惜しき上に、思しめしはからふことやあらむ、男宮生み奉り給ふべき御祈り、いひ知らず営ませ給ふ。石清水に般若会などいひて、山、三井寺などのやむごとなき智恵深き僧ども参り居て、日頃、法文の底をきはめて行なはせ給ふ。帥の中納言などいふ人、御後見（に）て、都のことも大事なれども、かの宮に日頃籠りて、御かはりにや、日毎に束帯にて御講もよほし行はれける。我も我もと御法説きて、祈り申しける中に、忠春とかきこえしが、「鼇海の西にはうみの宮、御産平安頼みあり。鳳城の南には男山、皇子誕生疑ひなし」としたりけるとなむ聞き侍りし。　（すべらぎの下第三「男山」（上・二七三～二七四頁））

と、近衛天皇誕生に先立って盛んに行われた皇子誕生祈願について語る条がある。

さて、忠春の願文の一節「鼇海の西にはうみの宮、御産平安頼みあり。鳳城の南には男山、皇子誕生疑ひなし」に関しては、諸氏が注釈を行っている。関根正直氏[1]は、

大亀の戴ける海中の山。渤海の東に五山あり。波に従って上下するを、巨鼇之を戴き、山始めて動かずと列子に見ゆ。神仙の住む所といふ。海の宮は竜宮のこと、うみに産の意をあてたり。鳳城は宮禁、男山は八幡宮。

と注し、海野泰男氏[2]も、

鼇は海中にあって蓬莱他の三仙山（あるいは五仙山ともいう）を背負っているといわれる想像上の大海亀。その住んでいる海が鼇海。「うみ」は海と「産み」をかける。「海の宮」は竜宮。

と注している。また、竹鼻績氏[3]も同様の注を付している。いずれも「うみの宮」の「うみ」を「海」と「産み」との掛詞と判断し、「うみの宮」を「海の宮」である「竜宮」としている。海野氏はこの注釈に基づき、忠春の願文を、

仙山を背負っている大海亀のいる大海の西には竜宮すなわちうみの宮があり、平安に御子をお生みなさるのは間違いない。宮城の南には石清水宮すなわち男山がある。その名のとおり男宮が誕生なさることは疑いがない。

と解し、竹鼻氏も、

大海の西方にはうみの宮（竜宮）があり、御産が平安であるこ

とは期待できる。皇居の南方には男山があり、皇子が御誕生なさることはまちがいない

と同様の解釈を示している。

このように先学は、「うみの宮」を「竜宮」と解し、安産の守り神として捉える見解を示しているが、管見において「うみの宮」を「竜宮」とした例や「竜宮」と安産を結びつけた例は見出せない。

本稿では、この願文の一節について改めて別の解釈の可能性を探ってみたい。

一　鼇海の西と鳳城の南

先行注の指摘通り、「鼇海」は、中国の『列子』巻第五「湯問篇」に拠っており、広く知られた同話からは「鼇山」「鼇戴」「鼇背」などの語も派生している。「鼇海」の原義は「仙山を背負っている鼇がいる海」であったが、

[1] 鼇海西邊地、宵吟景象寛。雲開孤月上、瀑噴一山寒。
人異髪常緑、草霊秋不乾。無由此棲息、魂夢在長安。
（唐・劉昭禹「霊観渓」詩）

と、例**[1]**のように「大海」の意を示すようになり、日本においても、例**[2]**のように同様の意味で用いられている。

[2] 白河法皇八幡一切経供養願文（藤原敦光）
渡二万里之鼇海一。凌二数仞之蜃楼一。
（『本朝続文粋』巻第十二・願文上）

なお、「鼇海」は韻文に[4]おける用例しか見出せなかった。

一方「鳳城」も、先行注が指摘したように宮城の意であり、中国に由来している[5]。中国の長安（現・西安）の意であったが、後に転じて天子の住まいである都を表すようになった。また、「鼇海」と同様、例**[3]**のように詩に用いられている。

[3] 征人遥遥出古城，双輪斉動駟馬鳴。
山川無処不帰路，念君長作万里行。
野田人稀秋草緑，日暮放馬車中宿。
鷲鷟游兎在我傍，独唱郷歌対僮僕。
君家大宅鳳城隅，年年道上随行車。
願為玉鏤繫華軾，終日有声在君側。
門前旧轍久已平，無由復得君消息。
（唐・張籍「車遥遥」詩）

日本においても、中国の意味を援用し、例**[4]**のように「天皇の住まいである都」の意味として用いている。

[4] 「昌泰元年六月廿六日・臨時仁王会呪願文」の一節
諸国教化　禁断殺生
百官潔斎　奉行諸善
鳳城内外　華聲緑辺
明神社下　霊験仏前
（『菅家文草』第十二・願文下）

なお、「鳳城」は、漢文体のみならず和文にも用いられている[6]。

これらの二語「鼇海」と「鳳城」が対になって用いられた用例は、

僅か一例ではあるが、同じく願文において確認される。

[5] 公家被供養東寺塔願文

夫東寺者、弘法大師奉勅弘仁年中所興隆也。

大師初飛三杵於鼇海之西畔、遙卜我朝之勝形、

後賜仁祠鳳城之南頭、長伝此地之大法

（『江都督納言願文集』巻第一・帝皇）

例[5]で示した願文冒頭部は、留学僧であった弘法大師空海が唐からの帰朝前に海岸で三鈷杵を投げて日本で伝法すべき場所を占った事と、東寺で仏法を伝えた事に言及している。例[5]には「鼇海之西畔」「鳳城之南頭」が対句表現として表れているが、『今鏡』[7]における「鼇海の西」「鳳城の南」の対句表現と酷似している事は注目すべきであろう。今回調査した願文資料の内、「鼇海の西」「鳳城の南」を対句表現とした用例は、現在のところ例[5]を含めて二例のみであるが、当時、「鼇海の西」「鳳城の南」が対句となりうる語句として人々に認識されていたことがうかがえよう。

対句表現が用いられやすいという願文の文体的性格に従って、忠春の願文においても「鼇海の西」と「鳳城の南」、「うみの宮」と「男山」、「御産平安頼みあり」と「皇子誕生疑ひなし」が対置されている。すでに検討した「鼇海の西」「鳳城の南」と、理解の平易な「御産平安頼みあり」「皇子誕生疑ひなし」が対句であることには頷けるが、「うみの宮」を「竜宮」と解し、それが「男山」と対置されることには疑問がある。そこで次に、「うみの宮」と「男山」の関係について考えてみたい。

二 「うみの宮」と「男山」

「うみの宮」と解される「竜宮」は、海中にあるという竜神の宮殿である。浦島伝説に代表されるように、人間界と隔絶した異境として仏典や説話などに描かれているが、安産に関わるような記述は見出せない。「竜宮」が安産と結びつかないとすれば、「うみの宮」を「竜宮」とする先学の解釈には首肯しかねるものがある。「うみの宮」とは、一体何を指しているのであろうか。

時代は下るが、『愚管抄』『平家物語』に「うみの宮」という語が見られ、出産に関わる場面において使用されている。

[6] 女ノ御身ニテ男ノスガタヲツクリテ、新羅・高麗・百済ノ三国ヲバウチトリ給テ後ニ、筑紫ニカヘリテウミノミヤノ槐ニトリスガリテゾ、応神天皇ヲバウミタテマツリ給ケル。（『愚管抄』巻第三）

[7] 女躰として鬼界・高麗・荊旦まで攻めしたがへさせ給ひけり。異国のいくさをしづめさせ給ひて帰朝の後、筑前国三笠郡にして皇子御誕生、其所をばうみの宮とぞ申たる。かけまくもかたじけなく八幡の御事これ也。

（『平家物語』巻第五「都遷」）

例[6][7]は、神功皇后が朝鮮半島に遠征した帰途、筑紫で応神天皇を出産したという同じ出来事が語られており、その出産場所

を「うみの宮」と称している。

この例【6】【7】を考え合わせると、忠春の願文中にある「うみの宮」が応神天皇出産の場所を指している可能性が出てくる。[8] 提示した用例の時代的齟齬や用例が二例のみであるという点に問題は残るが、解釈の一つの可能性として提案しておきたい。

一方、「うみの宮」に対置された「男山」が、諸氏の注釈に示された通り、石清水八幡宮のある山を意味していることはいうまでもない。石清水八幡宮は安産祈願の宮として知られており、祭られた三柱には応神天皇と神功皇后が含まれている。このような「男山」との関係も、「うみの宮」を神功皇后が応神天皇を出産した場所と解する論拠の一つとなりうるものであると考えられる。

おわりに

以上の検討をふまえ、「鼇海の西にはうみの宮、御産平安頼みあり。」を私に解釈してみると、

大海の西には神功皇后が無事に応神天皇を出産されたうみの宮（産みの宮）があり、御産が平安であることは間違いない。

となる。

『今鏡』における当該箇所は安産祈願の願文であるため、検討の際には同目的の願文からの用例引用が望ましいのであるが、そもそも現存する願文が多くはなく、管見の限りにおいて、安産祈願の願文が見出せなかったという資料的限界があったことを記しておく。

本稿は『今鏡』における「鼇海の西にはうみの宮、御産平安頼みあり。」の一節について、新たな解釈の可能性について検討、提案してみた。今後は、広く証左を求め、更なる論証を目指したい。

※願文の用例を収集するに際して使用した文献は、以下の通りである。『本朝文粋』『本朝続文粋』『本朝文集』『扶桑略記』『三代実録』『朝野群載』（『新訂増補国史大系』）、『性霊集』『菅家文草』（『日本古典文学大系』）、『江都督納言願文集』（『六地蔵寺善本叢刊』3、一九八五年、汲古書院）、続群書類従本願文集。

※引用本文は、『今鏡』は『今鏡全釈』上（海野泰男氏、一九八二年、福武書店）、『愚管抄』は日本古典文学大系『愚管抄』（岡見正雄・赤松俊秀校注、一九六七年、岩波書店）、『平家物語』は新日本古典文学大系『平家物語』上（梶原正昭・山下宏明校注、一九九一年、岩波書店）による。引用末尾の（　）内に巻名・頁数の順に記す。なお、傍線などは私に付した。

〔注〕

(1)『今鏡新註』（関根正直氏、一九二七年、六合館）頭注を参照。

(2)『今鏡全釈』上（海野泰男氏、一九八二年、福武書店）語釈を参照。

(3)『今鏡』全訳注・上（竹鼻績氏、一九八四年、講談社）語釈を参照。

(4) 願文は四六駢儷体が多いため、韻文とみなした。

(5)『列仙伝』（『太平御覧』巻一百七十八に所収）にある秦繆公の娘が鳳

凰の鳴き声に似る簫を吹く故事に由来する。

(6)『保元物語』『源平盛衰記』などに用例が見られる。

(7) 願文の文体は連続した対句からなる四六駢驪体である。詳しくは渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』(一九九〇年、勉誠社)、山本真吾『平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究』(二〇〇六年、汲古書院)等の先行研究を参照されたい。

(8) 同じく中世の用例ではあるが、「うみの宮」は和歌にも詠まれている。

①『夫木集』巻第三十四・雑部十六・一六一三一・西行上人

あさ日さすかしまのすぎにゆふかけてくもろずてらせよをうみの宮

②『夫木集』巻第三十四・雑部十六・一六一三二・藤原家隆

もろ人をはぐくむちかひありてこそうみの宮とはあとをたれけめ

③『拾玉集』第三・二九四八・慈円

かけまくも畏けれども産みの宮我が皇神にしろしあらませ

――チエン・ウエンヤオ、台湾 興国管理学院非常勤講師――